



第2講義室にて（2000年1月13日）

序

黒積俊夫先生は、名古屋大学文学部哲学講座において22年の長きにわたって研究と教育に尽くされ、平成12年3月をもって退官されます。ここに先生の長年の尽力と業績とを記念すべく、教え子と同僚が集い、退官記念の論文集を編むことになりました。

黒積先生が名古屋大学文学部に着任されたのは、昭和53年春のことです。本来4名の教員を擁すべき哲学・西洋哲学史講座は、当時、わずかに教授1名を数えるのみの危機にありました。以来、先生は、講座の中心として哲学概論の講義を担当し、また研究講義や演習において、カントをはじめ、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、ハイデガーなどドイツ哲学の高峰を縦横に論じて、真の学問的探求のあり方を教え、我々の進むべき道を示して下さいました。厳密な原典解釈にもとづく先生の諸々の講義は、幾多の後進を育て、知的な活気と情熱とを研究室にもたらして来ました。

先生は、こうして学生指導に惜しみなく精力を注がれると同時に、カント研究を中心とする緻密で独創的な考察にもとづく多数の論文を公刊し、また、大著『カント批判哲学の研究』を上梓して、学界に深い影響を与えて来られました。先生のカント解釈は、従来の統覚中心主義的なカント理解を根本的な誤りと見なす極めて創造的かつ挑戦的なものです。それが我が国のカント研究に与えた衝撃の強さは、「カント解釈の問題」と題して行なわれた平成4年日本哲学会大会特別報告の、特定質問者有福孝岳氏との白熱の論戦において、余すところなく我々に感得されるものとなりました。先生は、カントの理論哲学における経験の基礎づけを超越論的な視点から与える解釈に、一貫して批判の論陣を張り、カント哲学をむしろ経験に内在する視点からとらえる内在論の立場をとります。先生のこの立場は、1998年のボストンにおける国際哲学会において発表され、広く知られるようになりました。また2000年春のベルリンにおける国際カント学会においても発表の予定であり、内外のカント研究者の間で

活発な論議を呼ぶことが期待されます。そして本論集にも、先生のカント研究を継ぐ幾人かが論文を寄せる次第となりました。

ここに刊行される『哲学の根本問題 黒積俊夫先生退官記念論文集』は、1998年秋に、名古屋大学50周年記念事業の一環として催された数次にわたる研究発表会「哲学の根本問題」に集った卒業生をはじめ、黒積先生にゆかりのある研究者、大学院生の論文を集め、名古屋大学哲学会委員会の賛同を得て、『名古屋大学哲学論集』の特別号として出版されるものです。50周年記念事業ならびに本論文集の刊行事業にご協賛、ご協力いただいた同窓生の方々に深く感謝申し上げますと同時に、黒積先生の一層のご活躍を祈念いたします。

2000年3月 田村 均